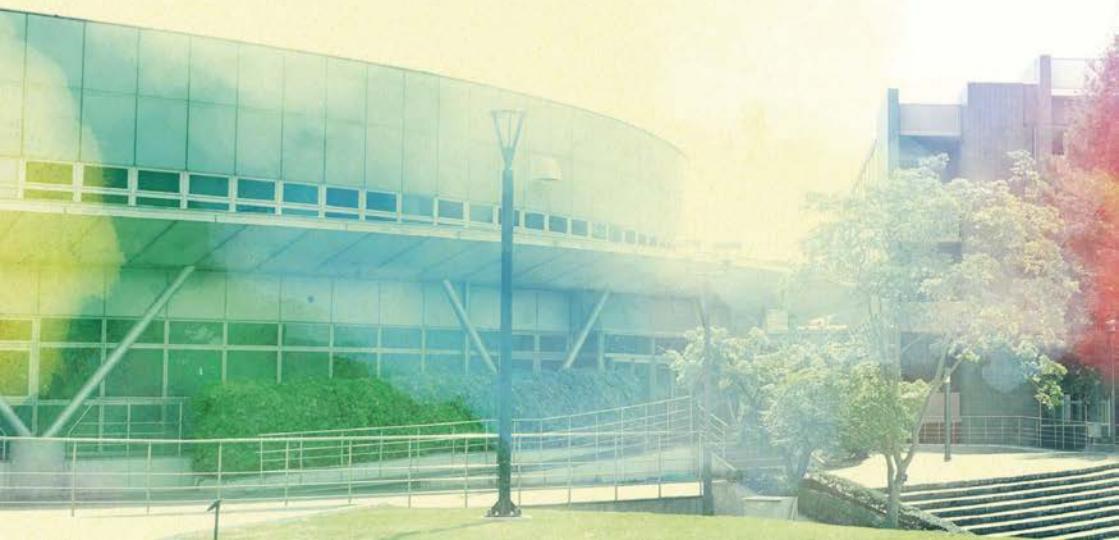




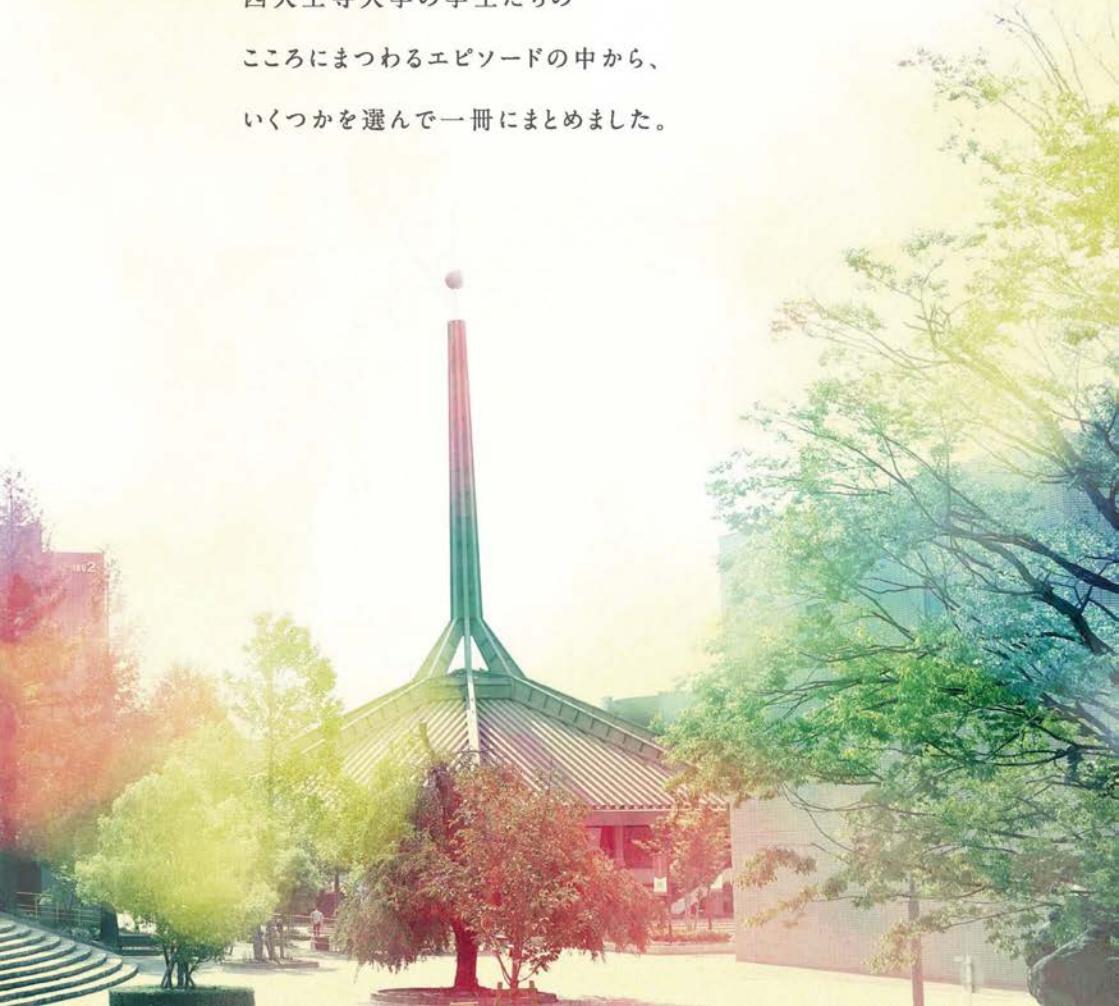
こころに、学びを。
STORIES 2019

「こころに、学びを。」を伝える、
「こころ」をうごかすエピソード。

多様な社会に生きる中で、
お互いの違いを理解し、受け容れ、調和していく。
相手を尊重し、自らを高めていくには、
すべての人々に向ける「こころ」が必要です。
四天王寺大学では、聖徳太子の教えである
「和の精神」「利他の精神」を原点に、
「知識・技術を修得する学び」に加えて、
「こころに、学びを。」という想いも大切にしていきたい。



そんな想いのもとに、
四天王寺大学の学生たちの
こころにまつわるエピソードの中から、
いくつかを選んで一冊にまとめました。



学園訓

一、和を以て貴しとなす

一、四恩に報いよ

四恩とは

国の恩

父母の恩

世間の恩

仏の恩なり

一、誠実を旨とせよ

一、礼儀を正しくせよ

一、健康を重んぜよ





STORIES 2019

- > クラスのみんなに友達に、ありがとう
- > 傘が繋げた大事な友達
- > どんなことも大切に
- > 学びの機会
- > 桜の優しさ
- > マタニティマーク
- > 私の理想の「和」
- > 勇気を出してよかったです!
- > 利他から生まれる廊下掃除
- > ほっこりキャンディー
- > 声かけで、人に寄り添う
- > 情けは人の為ならず
- > 利他の心とは



クラスのみんなに友達に、ありがとう

2017年の夏。私は大学内にあるさくら坂で転び全治1か月の骨折をしました。人生で初めての骨折でした。私はこの1か月で多くの友達に支えられました。その当時のことを書きたいと思います。私は保育コースに所属しているため、2回生時は毎日1限から5限まで授業がありました。そして、その授業で松葉杖の私を助けてくれていたのが、一緒に毎日学んでいた保育クラスの皆でした。朝、移動のために少し早くきていると、早く来ている友達が声をかけてくれたり、夏の暑い日で坂を上るのに15分近くかかり、熱中症になりかけていたら、また別の友達が日傘をさしてくれて、一緒に上ってくれました。一番仲のいい友達二人は授業と授業の合間の移動を授業に遅れてしまってでも支えてくれたり、精神的に支えになってくれたり、車いすを暑い中、坂でも押してくれたり。当時は毎日が申し訳なさと、思うように歩けない苦しさで、ずっと「ありがとう」「ごめんね」「ありがとう」「ごめんね」の繰り返しでした。ただ、友達が私してくれたことって、まさに、人を思いやる気持ち。和の精神ってこういうことをいうのではないかなどと考え、また、この経験を踏まえて私自身も思いやりの心を意識することができるようになりました。「本当にいい友達・クラスに恵まれたなあ」と今でも保育クラス、一番の友達には感謝しかありません。ここで改めてお礼を言います。本当にありがとうございました。



傘が繋げた大事な友達

私は人見知りで、大学に入ってからしばらく友達ができなかった。体育館に入るところに傘を入れると4桁の数字を設定して傘をロックできる傘置があり、授業前にそこに傘を入れて、数字を設定しロックをかけたが、授業後に傘を取り出そうと思ったらロックをかけた番号を忘れてしまい、傘がとれなくなった。母からもらった大切な傘だったのでどうしても諦めることができず、ひとりぼっちで格闘。そうすると、同じクラスの女の子6人がこちらにやってきて「どうしたん? 傘とれへんくなったん? 番号何?」と声をかけてくれた。すごく心細くて泣きそうになっていたところへ声をかけてくれただけで、嬉しくてたまらなかった。その女の子たちは4桁の数字の組み合わせを一から全部試して「開かへんなあ～。」と大苦戦。その時間はちょうどお昼休みだったので、みんなお腹が空いていたはず。それなのに何十分もわたしのためにガチャガチャと鍵とにらめっこ。すると、そのうちの何人かの女の子が「誰か人呼んでくるわ!」と言って鍵を持った職員さんを連れてきてくれた。ようやく鍵を開けてもらうことができ、傘も無事に取り出せた。みんな早くご飯が食べたかったんだろうに時間を使やして私を助けてくれた。しかも、その子たちは私に「早く一緒にお昼ご飯食べよ～!!」と言って輪に入ってくれた。3回生になった今でも、私はその子たちと一緒に毎日お昼ご飯を食べている。



どんなことも大切に

少しでもみんなが幸せな気持ちで過ごせる時間が増えたらなと思い、小さなことに思えるかもしれないですが、道端に落ちているゴミを拾ったり、服屋さんで服が棚から落ちていたらもの所にもどすなどを心がけるようにしています。また、大学で掃除をしてくれている人などを見かけたときは一言「ありがとうございます」とお礼を言うようにしています。掃除をしてくれている人がいるから毎日気持ちよく過ごせることを忘れないようにと思っています。また2回生になり、入学当初時間割やテストについて分からぬことだらけで不安になったことを思い出し少しでも1回生の役に立てたらなと思いピアサポーターに所属しました。これからは少しでも不安を取り除けるように、もっとみんなが相談しやすい場所にしていきたいです。

短期大学部 2年



学びの機会

大学構内ではゴミが出る。木々は美しいが枯れ葉を落とす。春夏秋冬、様々な美しい景色をキャンパスで観ることができるが、それは大学をきれいに保ってくれている人達がいるからこそである。それは清掃員の方々である。大学2回生の冬、食堂の前の芝生エリアは落ち葉の絨毯だった。しかし、清掃員の方はこれを手際よく一箇所に集めてくれている。あまりに手際よく、きれいにしていくものだから、私も一度試してみたくなり、手伝わせていただいた。作業の途中、清掃員の方が「後ろを見てはいけないよ。また枯れ葉が落ちて、いたちごっこだからね。」と笑いながら教えてくれました。清掃員の方も先輩からこの話を教わったそうで、学びとは受け継がれていくものだと実感した。また、私たちの大学生活は多くの人々に支えられているのだと改めて実感した。これに報いるために、この大学で学び、より上を目指し成長していくと私は思う。



桜の優しさ

桜はIBUの中でも人気の名物である。そのことが題材となった話である。老夫婦は桜を見るために大学に来たのだ。しかし、まだその日には桜の木は蕾の状態で花を見物するにはまだ早かった。二人は花見を諦めようとしていた。しかし、私は7号館の隣に満開とは言わないが咲いている桜の木があったことを知っていた。話しかけることを普段なら誰かに任せていたが、その時私しかいなかったのもあり話しかける事を決意した。入口で帰ろうとしていた老夫婦を呼び止めて奥まで歩くように促した。足が良い状態ではなかったので二人の荷物を少し持って奥まで歩いた。私も早く帰りたかったので正直老夫婦と話している時間は早く終わってほしかった。しかし、桜を見た後に「ありがとう」と言ってくれたので、その言葉だけで早く帰らなくて良かったと思った。最近は、電車のなかでは、体の不自由な人に積極的に席を譲るようにしている。知らない人でも積極的に話しかけるようになった。私もまだ優しさに関しては蕾であるが、いつか満開になる様に話す勇気と優しさを身につけていきたい。



マタニティマーク

朝、IBUへ向かう電車の中、私は混み合う車内で座席の端に座っていました。私の横に女性が立っていて、その女性のカバンには「お腹に赤ちゃんがいます」と書かれたキーホルダーがつけられしていました。私の身近な友人に妊娠中の子がいて、その大変さも感じていたので私は女性に「座ってください」と声をかけ席を譲りました。女性は「ありがとう」と言って座ってくれました。その後私は少し離れた場所に移動したのですが、女性が降りる際にも私が居る場所まで来てくれて「ありがとう」と言ってくれました。「ありがとう」の一言で私自身も凄く幸せな気持ちになりました。IBUの学園訓に「礼儀を正しくせよ」とありますが、私も普段から挨拶はきちんとして心がけています。

短期大学部 2年



私の理想の「和」

私が1回生の時の、部活の試合の帰り道の出来事だった。試合も終わり、6人くらいでわきあいあいしながら駅までの道のりを歩いていた。ある信号で渡り切った後に、一人の先輩が振り返って走っていった。何か忘れ物でもしたのかなと思い私も振り返ると、目の不自由な方と一緒に信号を渡ろうとしていた。私はその方がいたことにも気づかなかったのに、先輩は、周りをよく見て勇気ある行動をしたと思った。確かに今思い返すと、その先輩は普段から周りを気遣い、丁寧に接してくれる方だった。私はそれを見て、少しの勇気を出してみることで、お互いが幸せな気持ちになれると思うようになった。それまでの私は行動にすることが苦手で、後から「しとけばよかった。」と後悔することが何回もあった。それは人の目を気にしたり、恥ずかしさがあったりなどで、勇気が出なかったからだ。しかし今は、小さなことでも自分で行動するように心がけている。これは私がたまたま経験ただけであって、先輩から言葉で教わったことではない。先輩からすると、覚えていないほど大したことではなかったかもしれない。しかしこの出来事は私にとっては大きいことだった。私は先輩のおかげで変わることができた。そして、今の私を見た誰かが自分のことを客観的に見つめ直して、良い方向に変わることができるような、良い循環ができればいいなと思っている。



勇気を出してよかったです！

数か月前、テーマパークへ電車で向かっている時、急に信号のトラブルが起こってしまい、運転見合わせになってしまいました。電車の中では放送が流れ、しばらく運転の目処が立たないことが日本語のみで流れていきました。しかし、私の隣に座っているのは同世代くらいの韓国人の女性の二人組でした。その人たちには放送の意味が分からず、戸惑っている様子でした。私は普段から人見知りで、しかも友達とは現地集合ということもあり電車の中では一人でした。しかもしも私が海外で同じような状況に遭ったら不安で怖いだろうなと思い、普段は勇気が出ず自分から話しかけることはないのですが、スマホの翻訳機能で今の状況を韓国語に訳し、横に座っている女性に話しかけ、スマホの画面を見せました。すると、ようやく今の状況を把握できた様子で「ありがとう」と笑顔でお礼を言われ、その二人組は電車を降りていきました。結局それからも電車は動かずにその日のテーマパークへ行く約束はなくなってしまい、天王寺で遊ぶことになりました。勇気を出して話しかけることでこんなにも感謝してもらい、こんなにもいい気分になることを知ることができ、とても心に残る一日になりました。これからは、困っている人がいれば頑張って自分から話しかけられるように人見知りも克服していきたいと思いました。



利他から生まれる廊下掃除

私は去年の5月頃から、学校実地演習で中学校に行っていました。その時期は修学旅行や校外学習などの行事と重なっており、授業面でお手伝いすることが少なく、先生方は私に何をしてもらうか困っていました。すると、ある先生がトイレの掃除をされているのを見かけました。それを見た私は、いつもお世話になっている学校に何か奉仕活動ができるかと考え、掃除好きという自分の性格をここで活用したらしいのではないかと思いました。生徒さんに、もっと楽しく、健康的に、いい環境で学んで欲しいと思うようになり、ならば普段は掃除できない廊下などを掃除したら喜んでもらえると考えました。先生方は、申し訳ないとおっしゃいましたが、いつもの恩返しができればと思い、掃除をさせてもらいました。廊下は私が思っているよりも汚れており、さらに掃除をする範囲が広かったりしたために、掃除し終わるまでに3時間ほどかかりました。しかし、その間には一緒に掃除をしてくださった先生から普段は聞けないこと、学校の中で不安に思っていたことなどの深い話を自然と話すことができ、先生という存在を身近に感じられる素敵な時間となりました。終わってから廊下を見てみると、見違えるほどに美しくとてもいい気分でした。これからも利他の精神を持ち、誰かのために何かをし続けたいと思いました。



ほっこりキャンディー

大学生活に慣れた頃、帰宅途中の電車の中で困っている様子のおばあさんがいました。「大丈夫ですか?」と自分が困った経験があるからこそ相手も困っているのではないかと思い、声掛けをしました。もしかしたら、私の勘違いかもしれないと思うと声掛けに少しだけ時間がかかりました。日頃は、様子を見て声掛けするか時間をかけて吟味してしまいます。何度かタイミングを逃して声掛けできなかったことがあったからこそ今回はすぐに行動に移すことができました。行きたい駅に着くかどうか不安だったため声を掛けてくれて良かったと言っていただきました。おばあさんが降りる駅に着いて一安心だと思っていましたが、降りる時に足をひきずって歩いているのを見て改札まで送ることにしました。改札に着くと重ね重ね「ありがとう」と言ってもらい嬉しかったです。今まで「大丈夫ですか?」と声掛けしても心無い言葉を浴びせられることがありました。あまり良いことが無かったからこそ、こんなに優しい「ありがとう」と感謝の言葉をもらえるなど到底思ってなかつたので嬉しかったです。感謝の言葉だけでなくキャンディーも貰い、私にとってはほっこりする出来事でした。今まで周りの人に助けてもらった恩返しのために行動していたので報われて良かったと共にこれからも声掛けを続けていきたいです。



声かけて、人に寄り添う

施設での実習を終えた帰り道で、不自然な歩き方をしたパジャマ姿のお年寄りを見かけました。どうされたのかな?と近寄ってみると、実習先のデイサービスで見かけたことのある利用者さんでした。「○○さん、実習生の□□ですけど覚えてますか?」と挨拶をしましたが、気づいてくれません。このままでは交通事故に遭う危険性もあるし「私がなんとかしないと!」と思い、「今からどこ行かれるんですか?」と声をかけると「そうやな、どこ行くんやったっけ…」と答えられたので、「私と一緒にお散歩に行きますか?」と伝えて、施設に電話しました。しばらく側にいると施設から職員さんが来られて、無事に自宅に向かわれました。実習での短い関わりではわかりませんでしたが、もしかしたら「徘徊」されていたのではないかと思います。翌日、職員さんから「よく気づいてくれたね、ありがとう」と感謝されました。実習で一番難しかったのも、利用者さんへの声かけでした。一方的に質問したり、指示、命令調は相手を不快にさせると授業で習いました。今回は、それを生かすことで、役に立てたのかなと思います。これからも利用者さんのちょっとした変化に気づけて寄り添えるような介護福祉士になりたいです。



情けは人の為ならず

2月下旬、私は天王寺行きの満員電車に乗っていました。天王寺駅に到着し、下車する際、一気に乗客が降りようとしたため、目の前に立っていた80歳くらいの年配の女性が電車と駅のホームの隙間に落ちて挟まってしまいました。突然の出来事で驚きましたが、それに気づかない乗客が後ろから押し寄せてくる中、私は「早く助けないと大変な事故になってしまう」と思い、即座に周囲にいた人たちに「ホームの隙間に落ちた人がいるので一緒に助けてください」と声をかけ、協力を仰ぎました。そして、近くにいた男性2人と自分の3人で「いっせーの一で」と息を合わせ、その女性を助け出すことができました。その瞬間、周りから拍手が起ったのが感動的でした。また、女性が落ちてから救い出すまで10秒もかからず、ほんの一瞬の出来事だったことを覚えています。その後、女性は特に我がを負うことなく元気な様子だったので、本当に安心しました。私は人を助けることは、相手のためだけでなく、自分のためにもなると信じています。そのため、これからも助けを必要としている人がいれば、迷うことなく助けたいと思います。

大学 4年



利他之心とは

私は高校生の頃、ランナーとして出場していた父の影響を受け、地域で行われる四万十川でのマラソン大会のボランティア活動に参加しました。その日は、午後からずっと雨が降っていて、傘やカッパで雨をしのいでいた私たちでしたが、後半になるにつれて「早く帰りたい」という気持ちが大きくなりました。制限時間を過ぎ、内心(やったー帰れる!)と思いながら会場のスクリーンに目を向けたとき、ゴールまであともう少しというところにフラフラになりながら走ってくるおじいさんの姿が見えました。それを見た私たちは反射的に、「まだ1人おります! やけん残ります!」といって片付けたばかりのゴールテープをほどき準備しました。会場全体がおじいさんに届くように大きな声で声援を送ります。強い雨にも負けないくらいの声援の中完走したおじいさんは、フラフラになりながら私たちに「ゴールテープきらしてくれてありがとう、本当にありがとう」と苦しそうな笑顔で言ってくれました。感謝された照れくさと最後までやりきった達成感とが重なり、心の奥から何か込み上げてくるものがありました。これは4年経った今でも鮮明に思い出すことができます。私はこの経験を通して、利他之心は自分の内から自然にわいてくるものだと思い、将来学校現場で働く時、子どもの内に秘められた利他之心を「仮の指」のように引き出すことのできる教員になりたいと思っています。

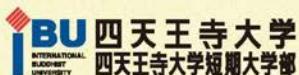
自らの考えや行動に影響を与えた、
いくつかのエピソード。

読んだみなさんのこころに、
私たちの想いが届きますように。

四天王寺大学はこれからも
「和の精神」「利他の精神」をもとに、
「こころの学び」の大切さを伝えていきます。



ここ
に、
学
び
を。
。



〒583-8501 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1 <http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/>
TEL.072-956-3183(入試・広報課直通) TEL.072-956-3181(代表)